

## エルネスト・フェドー『ファニー』小論

——忘れられたベストセラー小説——

滝澤 壽

はじめに

1850年8月、『人間喜劇』の完成を見ずしてバルザックがこの世を去る。まさに巨星墜つであり、その死はフランス小説史に大きな空白を穿つ。ボードレールの言を借りれば、「こと小説に関する一切の好奇心は、鎮まり眠りこんでしまっていた」（「フローベール著『ボヴァリー夫人』」）のである。新流派リアリズムが成立してくるのは、こうした混迷の50年代であるが、今日の眼から振り返ってみると、この10年間に試みられた多くの小説の中で今に残る作品は、フローベールの『ボヴァリー夫人』（1857）のみである。旺盛な生産力を誇るこのジャンルにしては、いかにも不作と言わざるを得まい。

不作の時代、確かに現代の我々の持つイメージはこれだ。しかし一方、無論当時幾多の小説が世に出され、しかもその幾つかは『ボヴァリー夫人』をはるかに凌いで世に受け入れられたことも、事実として認めねばなるまい。ルーアンの無名の新人がその文壇の処女作で、「公衆および宗教道徳ないし良俗に対する違反」の容疑で起訴され、スキャンダラスなデビューを飾ったのは、彼36歳にならんとする1857年のことである。そしてこの一大センセーションを巻き起こした話題作は、当の本人の推計によれば、刊行1ヵ月にして1万5千部が売れたと言うが、内実は話半分の2ヵ月でおおよそ6千6百部であったにしても、相当のヒット作であったことは間違いない。ところが翌58年、2ヵ月で29版、即ち当時普通1版千部であったから、2万9千部を売り尽くしたと言われる超ベストセラーが出現する。この数字には文献によりかなりの異同があり、筆者の手元にある第12版が1859年発行である事実からして、発売初年に11版というのが確実なところのようであるが、いずれにしても前者を軽く一蹴するに足る数であったことは確かだ。その名は『ボヴァリー夫人』の向こうを張ったと称する『ファニー』、作者はフローベールの友人エルネスト・フェドーである。しかし、あれから140年近くの時の流れの中で、この快挙も人々の記憶から零れ落ち、『ファニー』なる小説も、E. フェドーなる作家も歴史の闇に没し、今や古典の仲間入りをした『ボヴァリー夫人』と栄光に輝くその著者の余光の下に、時として色あせた相貌を浮き上がらせるにすぎない。

本小論は、歴史上しばしば繰り返されるこうした逆転現象の一つを取り上げて、1850年代、第二帝政下の社会と文化、とりわけリアリズム成立の思潮の中に位置づけながら、その意味を考えてみようとするものである。このことは同時に、当時の大衆レヴェルでの文学受容の有り様をも問うことになるだろう。

## I. エルネスト・フェドーと『ファニー』

### 1) フェドー略伝

エルネスト・フェドーは、1821年3月16日パリに生まれている。ちなみにフローベールは同年12月12日ルーアンの生まれである。フェドーの場合、1873年の死の前年に刊行された『19世紀世界大辞典』(P. ラルース)にはフローベールとほぼ同量のスペースを与えられていたのに、現代の代表的な事典には申し訳程度の記述があれば良い方で、中にはまったく無視されていることもある上に、「その生涯と作品についてのまともな研究はまったくない」(プレイヤード版『フローベール書簡集』II, p.1361) 現状にあっては、略歴を記すにしても文字通りの略歴に止まらざるを得ない。マクシム・デュ・カン(1822-94)——アカデミー・フランセーズ会員にまで上り詰めながら、ついに「不滅の人」とはなりえず、今や彼もまたフローベールの友人としてのみ語られる——の『文学的回想』(1892)の中におよそ次のような一節がある。8歳か9歳の折り、学友の一人が即興で「ワートルローの戦い」を物語り、クラス全員をあっと言わせたというのだ。半世紀以上を経てなお、まざまざと回想録作者の脳裏に浮かんだ、熱っぽくも生彩に富んだ語り口の持ち主こそ、後の『ファニー』の産みの親であり、この才気溢れる少年は、そのままいささか自信過剰で自負心の強い才人となっていったようである。マクシムとエルネストはサン＝ヴィクトール寄宿学校の同窓であったから、このエピソードはその頃のことであろう。それにしても、有為な若者にとって文学への道は決して平坦なものではなかった。ワシントン・アーヴィング(1783-1859)の短編の翻訳などという手すきびを別にすれば、彼の文壇デビュー作は23歳、1844年に発表した処女詩集『我が国の女性達』である。祖国の栄光とジャンヌ・ダルクを始めとするフランスの淑女達に捧げられた詩は、ロマン派の首領ヴィクトール・ユゴーのお褒めと励ましに与かりはしたものの、読者の迎えるところとはならず、時代遅れの「熱狂的叙情詩」(dithyrambe)や「英雄書簡詩」(héroïde)は当代の好尚に合わないことを悟らされたのであった。この不首尾は大きな痛手であったらしく、同年卒然と筆を折り、ラフィット銀行に勤務、かたわら株の売買に手を染め、破産の憂き目にも会いながらかなりの儲けを得たらしい。この頃の委細はほとんど知られておらず、ピエール・マルチノもその著『第二帝政期のリアリズム小説』の中で、ただ「暮らしは裕福で満ち足りており、彼は楽しみ、そして結婚した」と記しているだけである。いずれにしても、経済的必要に迫られたこともあろうが、この経験は時代と社会そしてそこに蠢く人間達を肌で感じ、それらを見る眼を養ったことは間違いあるまい。彼の名前が再び我々の前に現れるのは、1856年、一連の記事の署名としてである。いわく、「エジプトの理想」、「現代のインド」、等々。そして当時の東洋研究熱に乗って、図版入りの大作『古代民族の葬儀慣習と墳墓の歴史』3巻(1857-61)を著した。テオフィル・ゴーチエの『ミイラ物語』(1858)やフローベールの『サラムボー』(1862)の執筆の契機と資料を与えたと言われるこの研究によって、フェドーは先ず考古学者として世に出ることになった訳である。銀行を辞め、ゴーチエの主宰する「アルチスト」誌の仲間に加わり、ボードレール、フローベール、ゴンクール兄弟等と親交を深めつつ文学への復帰を模索していた彼は、1857から8年にかけて同誌に散文詩集『四季』を掲載する。春夏秋冬の自然の移り

行きを背景に、若いカップルの恋の行方を詩った叙情溢れる物語である。これに自信を得て、さらには話題作『ボヴァリー夫人』に対抗する気概を込めて、ついに問題の『ファニー』を発表する。1858年5月22日のことである。本小説については後に詳述するが、この一作が洛陽の紙価を高らしめ、一夜にして著者を文壇の寵児に押し上げる。以後、リューマチ等の宿痾に悩みながらも、その死に到るまで堰を切ったかのように書き続け、『ダニエル』(1859)、『カトリーヌ・ド・ヴェルメール』(1860)、『シルヴィー』(1861)、『サン＝ベルトラン氏』(1863)等の小説を矢継ぎ早に刊行、さらには戯曲、評伝にも手を広げた。それが彼の持ち味か、あるいは限界なのか、はたまた流行作家の宿命か、フェドーのこれらの小説は結局『ファニー』と同工異曲の写実的心理小説で、次第にいわゆる中間小説あるいは通俗小説の色を濃くしていったのである。1873年パリで死去、享年52。なお、劇作家、ヴォードヴィル作者のジョルジュ・フェドー(1862—1921)は、その息子である。

## 2) 『ファニー』梗概等

副題は「研究」(Etude)。リアリズム派やフローベールとの友情等について語った著者自身の序文(1870)によれば、社会風俗研究の意であろう。確かに、小型本で250ページに満たない小品であり、登場人物も基本的には恋人同士の二人、伝統小説のような筋立てはほとんど皆無に近いことを考えれば、この副題も頷かれよう。

物語は嫉妬に狂い、人生に幻滅した一青年の告白の形を取っている。けれども告白の語り手であるロージェは、語源的なそして伝統的な意味での主人公(héros)ではもはやなく、主要登場人物(personnage principal)というにすぎない。幕開け、生に疲れたロージェは、一思いに命を絶って決着をつけることも出来ず、海辺の森の中の廃屋に引きこもる、不幸な恋の深手を負って。舞台はパリとその近郊の別荘。24歳の彼はお互いに惹かれるように、美しい人妻ファニーといつしか愛し合うようになっていたのだ。ファニーは11歳年上の35、夫は40、しかも3人の子の母である。二人は深い仲となるが、男はただ甘美な恋に身を任せれば済むのに対して、女は秘め事を持ちつつも、一方において家庭生活を壊さないようにと望む。最初の内は夫のことなど脳裏に浮かびもしなかったロージェも、次第にその存在が気になってくる。ファニーはこの恋は自分にとって犠牲なのだと言いつつ、全き愛を誓う。しばらくは幸福に我を忘れていたロージェであったが、ある日、恋人の運命をその手に握っている夫を知りたい、是が非でも会ってどんな男かを見定めたいという思いに駆られる。ファニーもこの欲求に負け、ある家のパーティーの席上三人が一同に会する機会を設ける。押し出しが良く、精気に溢れた夫を前にして、まずは圧倒され、屈辱を感じて心乱れる。しかしすぐに自尊心が頭をもたげ、初めて激しい嫉妬を覚えて、その男をはっきり恋敵と意識する。嫉妬するのが夫ではなく、愛人だという役割の逆転、そこにこの小説の奇抜さと独創性があるのだが、この場面を転回点としてロージェの心の葛藤、愛する女を共有していることから来る愛憎劇に焦点が絞られる。彼は嫉妬のあまり、生きていくこともおぼつかず、ファニーを責めて夫に対する気持ち、夫婦のありのままの関係を問い詰める。そんな折り、夫の事業がうまくいかなくなり、夫婦関係も冷却したことを知り密かに喜ぶ。そして憎い恋敵が金策等でイギリスへ渡ることになると、ファニーを独り占め出来る日を今や遅しと待ち受ける。それほど共有関係は彼にとっておぞましいものだったのだ。そこでこの絶好の機会を捉えて、

彼女は自分一人のものだから、夫が帰って来ても、そしてたとえ一つ屋根の下で暮らさなければならぬとしても、絶対に夫婦関係を持たないことを、脅迫めいた哀願の末にファニーに誓わせる。やがて夫が帰京し、ドラマチックな破局を迎える。しばしは誓いを信じて平安を得ていた彼の心も、恋の囚人の常としてすぐに疑惑に逆巻き、猜疑心が湧き上がる。恋人の誠実を信じようとしても信じ切れないロージェは、ファニーの誓いを己の眼で直に確かめたい誘惑に抗しきれず、恋人の家に向かう。そこで彼が見たものは何であったか。読者大衆の好奇をそそり、フローベール等擁護派は高く評価したが、侃々諤々の議論を惹き起こしたクライマックスの場面である。予め隣の家を借りていた彼は、ある夜、夫妻の家のバルコニーに侵入し、窓の後ろにうずくまって覗き見をする。あろうことか、彼の目に写ったものは、夫を誘いその腕に抱かれる女の姿であった。ロージェはもう一度だけファニーに会う。軽蔑と憎しみ、そして訣別の言葉を投げつけるためであった。すべてを捨てた彼は、隠れ処に潜む傷ついた獣のように、ボロボロの我が身と心が消え去る日をひたすら待ち望むのだ。

## II. 第二帝政下1850年代の文学状況

### —レアリスムの勃興と成立—

第二帝政（1852—70）は、二月革命（1848）後の混乱に乗じ大ナポレオンの栄光の神話への眩暈を利して、フランス史上初の大統領となり、その大統領自らのクーデターによって皇帝の座にまで上り詰めた、甥のルイ・ナポレオン、ナポレオン三世治下の政治体制である。成立の過程の非合法故に、常に胡散臭さが漂い、その維持にはやはり表裏両面での力の行使が不可欠だった。言論・出版の取り締まりに関しても検閲の強化が図られ、あらゆる出版物の事前届出制や掲載文に対する当局の警告3回で即当該の定期行物は廃刊という規定等を盛り込んだ政令が、1852年2月17日に公布される。執筆者も編集者も戦々恐々、権力の顔色を窺うこととなった。1819年5月17日の出版法を適用して、1857年に相次いで告発された『ボヴァリー夫人』と『悪の華』、この有名な両文学裁判も、まさに頂門の一針だったのである。と同時にムチのみならずアメの政策、種々の巧妙な懐柔策によっても、多くの文化人・知識人が沈黙を守り、あるいは体制化していったのであって、英仏海峡の孤島から悪しざまに独裁的体制を揶揄・攻撃し続けたユゴーのような存在は少数派であった。それにしても、二月革命に賭けた夢の挫折と帝政に対する恨みつらみは、常に暗い底流として伏していたのである。

第二帝政はまたブルジョワの時代、群衆の時代、即ち前代に比し極めて凡庸な時代の到来であった。産業革命の進展は、経済的豊かさと共に今日に先駆ける大衆文化状況を惹起する。しかも先にも述べたように、血による正統性を有さないナポレオン三世は、好むと好まざるとにかかわらず、実にあやふやな無名の大衆を支えとする他はないが故に、その人気取りに腐心し、他方大衆はあやうい支えを共有することで一種の共同体的平等意識を持つ。そこに見せ物興行政治が行われる必要性が生じて来るのだ。オスマンのパリ改造計画にしても多分にこの要請が根底にあり、オッフェンバックのオペレッタは一面で群衆の祝祭の音楽化とも言えよう。さらには、こうした時代を象徴するのは、当時欧米各地で頻りに開催された万国博覧会であろう。1851年、ロンドンで第一回が開かれ、55年、67年と二回にわたって第

二帝政下のパリで行われた万博は、産業のみならず群衆の祭典でもあったはずである。ところで、55年の第二回パリ万博にはハブニングがあり、もう一つのスペクタクルが番外として提供されたのだ。ギュスターヴ・クールベ（1819—77）による世界初の個展「リアリズム展」である。前年54年には官展は開かれず、55年に万博を記念する大美術展が開催されることになっていた。彼は新作『画家のアトリエ』、旧作『オルナンの埋葬』、『ジャンフルーリの肖像』等14点を提出したが、審査委員会は標題を挙げた3点を「相応しからざる絵」として展覧を拒否する。もともと個展を開く計画があった上に、この扱いを受けて、根が過激なクールベは、展覧会場のすぐ近くのモンテーニュ通り7番地に自費で会場を設けたのである。看板に曰く、「リアリズム展。ギュスターヴ・クールベ。40点出品」。これは明らかに画壇を支配するアカデミー派への挑戦、反逆であり、50年前後から話題になりはじめ、しばしば物議をかもして来たリアリズムの公の旗揚げであった。さらにカタログ冒頭の宣言に曰く、「1830年の人々にロマン派という肩書が与えられたように、私にはリアリストの肩書が押しつけられた。〔……〕当代の風俗、観念、様相を自らの判断に従って表現すること、一言で言えば、生きた芸術を作ること、これが私の目的である」。当時この前衛集団は瑣末、平板な日常の事物を羅列し、時に際どい卑俗さを売り物にするとして誹謗・中傷を浴び、リアリズム、リアリストという呼び名は完全なる軽侮語であったが故に、これに反駁した前段の肩書返上論とは一見矛盾するようであるが、後段に明らかのように、これは彼等流の紛れもないリアリズム宣言と言ってよい。何故なら、自分が現に生きる時代と生活を真っ向から取り扱うのが、リアリズムの原点だからだ。こうした意味では、この主張はボードレールの「同時代の日常生活の中の詩」なる「近代性」(modernité)の理論と通底している。そもそも、今我々が問題にしている狭義のリアリズムの意識は、美術のジャンルから生まれたもので、リアリズムなる用語も美術批評家ギュスターヴ・プランシュが、1837年に使ったのが初出とされている。文学においては、既述のようにクールベがその肖像画を描いている盟友ジャンフルーリ（1821—89）が、初期のリアリズム運動、即ち『ボヴァリー夫人』が出るまでの50年代前半の運動をリードした旗手である。美術、文学両ジャンルの関係は当時表裏一体で、ジャンフルーリのリアリズム理論もクールベの影響なしにはあり得なかっただろう。ちなみに、先に引用したクールベのリアリズム宣言のゴースト・ライターは、実はジャンフルーリだとも言われている。

最後に、この時期の文学状況を小説を中心に一瞥しておこう。『ボヴァリー夫人』あるいは『ファニー』によって、フローベールやフェドーがデビューしたのが、57、58年であるから、ジャンフルーリが主導したリアリズム勃興期には、二人とも無名の修行時代であったし、『シャルル・ドマイイ』（1860）で名を知られるようになるゴンクール兄弟も同然であった。ジャンフルーリが処女短編集『犬っころ』を自費出版した翌年、1848年、デュミ・モンドの世界を大胆に扱ったデュマ・フィスの社会風俗小説『椿姫』が喝采を博す。52年、作者自らの手で劇化された『椿姫』も驚異的な成功をおさめ、リアリズム演劇の嚆矢とされる。これと前後して、アンリー・ミュルジェールが『ボヘミアンの生活情景』（1845—49）を、アンリー・モニエ（1799—1877）が一連の「ジョゼフ・プリュドム物」を書き継ぎ、ジャーナリズムの発展に伴う新聞小説の興隆とも相まって、一世を風靡する。後期ロマン派の詩人ジェラルド・ドゥ・ネルヴァル（1808—55）晩年の「詩そのもののような小説」、『火の娘達』

(1854) や『オーレリア』(1855) 等を除けば、リアリズムあるいはその傾向の作品が当然主流であるが、既述のように現代までその命脈を保っているものはほとんどない。ジャンフルーリの『マリエット嬢のアヴァンチュール』(1853)、そして10万部を売ったと言われ、同種のテーマを扱っていたが故に『ボヴァリー夫人』執筆中のフローベールを一時不安に陥れた『モランシャルの市民達』(1855) にしても、さらにはその戦闘的な弟子デュランティー(1833—80) の『アンリエット・ジェラルルの不幸』(1860) にしても、そうである。彼等の主張やリアリズムの理論は、ジャンフルーリの評論集『リアリズム』(1857) やデュランティーが発行した機関紙「リアリズム」(1856—57) に説き尽くされているが、弱点はその正当性を証明する決定的な実作が欠けていることであった。「銀板写真派」のリアリズム(ジャンフルーリ)、「社会的有用性」のリアリズム(デュランティー)と言っても、看板倒れの感があったのだ。こうした局面に登場したのが『ボヴァリー夫人』のフローベールであり、彼はこの一作でリアリズム派の首領に祭り上げられた。本人の意思と否定にかかわらぬ、時代の潮流と言えよう。そして例の裁判沙汰の興奮冷めやらぬ内に、この問題作を尻目に版を重ね、ベストセラーとなったのが、『ファニー』だったのである。

### III. 『ファニー』 盛衰

#### — 作品小批評史 —

ドイツのロマニスト、ハンス・ロベルト・ヤウスは文学の受容理論を展開したその著『挑発としての文学史』(饗田収訳、岩波書店)の中で、「文学史をどのように方法論的に基礎づけ、また新たに書くことができるか、という問題」に対して、七つのテーゼを提示しているが、その第三のテーゼは次のようなものである。

〔テーゼⅢ〕 このように再構成しうる作品の期待の地平は、その作品の芸術性格を、想定した公衆に対する作品の作用の種類と程度に応じて確定することを可能にする。前もってあった期待の地平と、新しい作品の出現(この作品を受けいれると、馴れ親しんでいる経験の否定か、あるいは初めて明白になった経験が意識化され『地平の変化』をひきおこすことがありうる)の隔たりを、美的懸隔と言うことにすれば、これは、公衆の反応と批評の判定とが作り出すスペクトル(突発的な成功、拒絶、あるいはショック。まちまちの讚意、徐々の、あるいは時期遅れの理解)をもとに、歴史的に対象化されうるのである。」

そしてこのテーゼの例証として、『ボヴァリー夫人』と『ファニー』を挙げて、敷衍している。用語は一見難解であるが、要するに既成の美学にどっぷりと浸っている読者の期待の地平に合致すればするほど、娯楽性、通俗性の強い、すなわち受けの良い作品となり、逆にその美学を粉碎してしまい、地平の変更を迫る衝撃性の強い作品ほど、その変更が完了するまで世に受け入れられ難いとする論で、『ファニー』が前者、『ボヴァリー夫人』が後者の典型だとしているのだ。そしてその理由を、次のように説明する。「主題からすると、この二つの小説は、新しい公衆の期待に応えるものであった」。二作はいずれも、ヤウスも援用しているボードレールの表現を借りれば、「この上もなく使い古され、この上もなく身売り尽くしてきた題材」である不倫を扱ったが、「嫉妬というテーマに新しい照明を当てるにあ

たって、「月並み化した三角関係」、その「三者の古典的な役割から予期されるような関係を逆にした」と言う。つまり、「フェドーは『三十代の女』の若い恋人を、〔……〕愛する女の夫に嫉妬するようにさせ、こうした苦汁に満ちた境遇によって破滅させる。フローベールは、ボードレールがダンディズムの極致の形式と評した、田園での医師夫婦の姦通事件に不意の結末を与える。すなわち、欺かれたシャルル・ボヴァリーという滑稽な人物こそが、結末では崇高な特徴を帯びてくるのである」。こう述べた後、ヤウスはこの二篇の小説の質の異なった成功を説明するのに、先ず「二つの小説の叙述形式の作用」を問題にする。「フローベールの形式上の革新、すなわち彼の〈非人称的叙述 *impassibilité*〉の原理は、〔……〕『ファニー』の刺戟的な内容をなじみの告白小説調で読まされていた公衆にショックを与えないわけはなかった」し、「この新しい文学形式は、フローベールの読者公衆にく使い古された筋〉をこれまでとは全く違った感覚で知覚することを強いる」、「非人称的（ないしは局外者的）な語り方の原理と、いわゆる〈体験話法〉の手法とが結びついたものであった」。そして、『ボヴァリー夫人』がやがて「期待の新しい標準」として受容された時、「この標準は、フェドーの弱点、すなわち、美文、流行となっていた効果、抒情的で告白調の決まり文句などは耐え難いものであり、『ファニー』は色あせた昨日のベストセラーだとするものであった」とする。さらに、「新しい美的形式はどのようにして道徳的問題に対し、考えられる限り最大の社会的作用を及ぼすことができるのか」を明らかにし、『ボヴァリー夫人』の読者を、新しいくもの見方 *manière de voir les choses*〉を通じて、彼らもつ道徳的判断の自明性から放り出すことができたのであり、公衆道徳からすればすでに答えの決まっている問題を、再び未解決の問題にしたのである」と論を進めて、美的懸隔を惹起したフローベール小説の革命性を結論づけている。ヤウスの文学受容美学に基づくパラダイムの変革の理論は、大筋で二つの小説の受容の有様を解明しているが、論考の成り立ちが講演による文学理論の提示という制約もあり、いささか具体性に欠けるうらみは残る。そこで以下において、『ファニー』を中心にその作品批評史の概略を辿ってみたい。

先ず、ライヴァルと目されたフローベールの見解を、主としてフェドー宛の書簡に探ってみる。二人は友達同士で、お互いの作を批評しあう仲であったから、当然フローベールは『ファニー』の概要もその執筆過程も知っていたし、有名なバルコニーの場面で大胆すぎる描写かと逡巡するフェドーを、「馬鹿だなあ、君は。それがこの本の売りじゃないか！」と励ましたと言う。既述のように、『ファニー』が上梓されたのは1858年5月22日であるが、ちょうどこの時期フローベールは『サラムボー』執筆準備のためにカルタゴ遺跡の現地調査中であった。クロワッセに帰り、「師として敬服し、兄弟として心から愛するギュスターヴ・フローベールに」という献辞入りの本を手にするや、早速次のような手紙を送っている。

「『ファニー』を一気に再読しました。もっとも、そらんじていたのですが。僕の印象は変わりませんが、まさに全体がよりスピーディーに思われました。優れた作です。何も心配せず、もう考えないこと。こちらへ来られた折りには、ただ、二、三の細かい、取るに足りないちょっとしたご注意を申し上げたいと思います。」(1858年6月20日付)

フェドーのその後の諸作については、時にかなり立ち入った論評をしているフローベールであるが、『ファニー』に関しては多少まとまったものはこれだけで、その評価が「優れた作です」(C'est bon.) とは、いささか素っ気ない。さらに、「ルーアンの辻馬車の御者達が

御者台で、『ファニー』（歴史的な）を読みながらくつろいでいます」（1859年6月16日付）とか、ルーアンの23歳の金持ちの青年が、17歳の美少女と結婚しようとしたが、「ある日、少女の仕事机の上に、E. フェドーなる人物の『ファニー』という題のいやらしい本を見つけ」、いさかいの末、破談になった、とかいう真偽定かならぬ逸話（1859年8月30日付）を書き送る筆振りには、称賛というよりは揶揄の調子がむしろ感じられよう。

献呈本の寄贈を受けたゴーチエは、「君の本はとてもしっかりしていると思う。『ファニー』できっと大成功をおさめるでしょう」とその礼状に書き、かつ既述の考古学の著作の故もあってか同年刊行の自著『ミイラ物語』をフェドーに捧げていること等から推測すると、一定の評価を与えていたらしい。ジョルジュ・サンド（1804—76）も賛辞を送っているし、デュマ・フィスはフェドーがその才を演劇に向けたら心配だと漏らし、さらに将来性の点ではその才能はフローベールを上回るかも知れないと述べている。これらの概ね好意的な態度に対して、ボードレールの場合は彼一流の韜晦術を駆使するだけに、一筋縄ではいかない。先ず彼は贈呈本のお礼に次のように書き送っている。

「御本を受け取ったその晩すぐ、私はそれを読み、朝までにもう一度読み返しました。これはまさしく立派な本、密度が高く、堅牢で、四肢がしっかりと接合されており、残るであろう本です。〔……〕要するに、あなたは誇りをもつ権利があるのです。驚くべき分析力をもっておいでになる。しかもあなたは、分析に与えるに叙情的な傾向と抑揚とをもってするのであり、それこそは神経質で閑暇をもつ男、恋愛の経験に真に向いている唯一の種類の子供の男、自然な抑揚なのです。〔……〕犯された羞恥心の名において嘆き声を立てる人々とは反対に、私は、悲惨の深みを増すことになる上品な表現や、かくも多くを推察させるこの見事な術<sup>フェール</sup>に、感嘆するものです。——幼稚で軽薄な二つの小さな事柄、恋愛と姦通との恐るべき効果をこれ以上うまく示すことは本当に不可能です。そして、自分が夫になったつもり恋人の、涯しもない善意、そして当然ながら彼は、真面目な動物たちの流儀で、自分は知らずに滑稽なものとなるのです！だが確とご存じでしょうか、夫、人生における最強者であろうと欲し、実際にそうである、この太った巨漢、この勝利者は、成功から来る全能の魅力をもっており、想像力をもつ多くの人々は、他の男よりもむしろこの男を愛するであろうと、ご存じでしょうか？」（1858年6月14日付、阿部良雄訳）

このように耳触りのよい賛辞を連ねてはいるが、真意はまったく逆であったらしく、母のオービック夫人宛には、本音を冷たく言い放っている。

「『ファニー』、大好評、厭わしい、極度に厭わしい本。」（1858年12月11日付、同訳）

『ファニー』に対する批評の動向を決したのは、何と言っても文壇の大御所、『月曜閑談』の批評家サント＝ブーヴの論評であった。6月14日付けの「モントゥール」紙上で、彼はフェドーの作を絶賛した。即ち、先ず「この本は躍動し、生き生きし」、「燃え上がり、輝く、情熱の芸術家の作品」であると規定して、次のように言う。

「『ファニー』は研究と副題を付されている。けれども、それは中編小説以上のものであり、形式の点からも、構成の点からも、諧調の点からも、終始一貫支配しているある種の息吹の点からも、ほとんど一篇の詩である。〔……〕『ファニー』は『アドルフ』と同じように、まるで賭をするように構想され、書かれたに違いないと思いたくなる。即ち、『二、三の疑い深い友達に、登場人物は二人に局限され、状況が常に同じ、そのような小説にも

ある種の興味を与えることが出来るのだということを納得させるためである。』これは『アドルフ』の序文のバンジャマン・コンスタンの言葉であり、またフェドー氏がなし得たことである。〔……〕『ファニー』にあっては現前しているのは二人の登場人物だけであり、第三の人物は常に想念の中に存在し、面とむかってその姿を見るのはたった一回である。〔……〕状況はあらゆる小説が糧にしているものと同じである。若くて、愛すべき、エレガントで優雅、少しばかり気が弱いロージェは、世馴れた社交界の婦人で、経験も情愛も豊か、状況のあらゆる困難を一身に引き受けて、甘い喜びのみを残したいと望んでいる、ファニーの目にとまり、愛された。物語はロージェ自身によって語られるが、彼は主人公 (héros) ではなく (小説の主人公も女主人公ももはや存在せず、そんなものはずっと前に死んでしまっている)、嫉妬の毒にあたった被験者にして患者、病人にして犠牲者である。〔……〕彼 (フェドー) は見事な症例への分析の大胆な適用を我々に見せようとする事だけを、恐らく考えたのだ。フェドー氏によって提出された症例の独自の点、それは嫉妬の転換である。普通、嫉妬というものは、欺かれたと思う権利を有する者、つまり夫の内にあるものであるが、ここでは愛人の男の内にあるのだ。〔……〕『アドルフ』は正真正銘の傑作ではあるが、当時支配的であった、形而上学・感傷派の欠点の幾つかを持っている。著者はあまりに繊細で、微に入り細をうがちすぎるのだ。〔……〕(『ファニー』の) 著者は純然たる分析家ではなく、見者である。『ファニー』は、画家と外面の色彩家の資質を持つ人間によって語られ、くっきりと描き出されたかのような内面の物語である。〔……〕この小さな本にあっては、すべてが、この枠に納まりきれないほどの力強い天性を予告し、それはこの本にはちきれんばかりに満ちている。有り余るほどの力があるのだ。著者はもっと広大な場でこそ、もっと伸びやかに出来るであろう。〔……〕新たなもう一人の小説家の誕生である。』

引用が長くなったが、一読して明らかなように、新人にも等しい作家に対するものとしては異例の肩入れである。サント＝ブーヴの論の根幹をなすのは、コンスタン (1767—1830) の『アドルフ』(1816) との比較であって、彼自身が同様に書評を書いた前年の話題作『ボヴァリー夫人』等のリアリズム小説との関連については、少なくとも表面的にはまったく触れられていない。リアリズムの側面よりは、フランス伝統の心理分析小説の系譜に連なるものとして、『ファニー』を評価するというのが、サント＝ブーヴの立場であった。彼はまた別の機会に、『ファニー』は自著『愛欲』(1834)、ゴーチエの『モーバン嬢』(1835—36)そして『ボヴァリー夫人』と共に、「この時代の四冊のバイブル」だとまで断言している。文壇の大立者のお墨付きを得て、フェドーとその作の前途は開けた。自己韜晦が十八番のボードレールはこの時評が出るや、早速サント＝ブーヴ宛に賛辞を書き送り、文壇の記録屋ゴンクール兄弟はその日記に、「チュルガンやフェドーといった輩の侵入」を記し、これには裏があるのではないかと仄めかしてもいる。事の真相は藪の中だが、株取り引きで鍛えた処世術の持ち主で、権威者に擦り寄ることもあえてするフェドーではあるし、またその頃二回目の破産に遭い、是が非でも自作をヒットさせなければならない状況に立ち至っていたことは事実である。『ファニー』第二版に、『月曜閑談』の連載紙「モニトゥール」の当時編集長だったチュルガンへの献辞や著名な文芸評論家、小説家ジュール・ジャンソンの序文が現れるのも、以上のこととまんざら無関係ではないのかもしれない。それはそれとして、ここで付言

しておかなければならないことは、こうしたサント＝ブーヴの筆勢が次第にトーンダウンし、時と共にその熱が冷めていったことである。偉大な批評家ではあっても時に犯す見込み違い、これはその典型的な一例であろう。

『ファニー』は筆禍事件には至らなかったものの、前年に『ボヴァリー夫人』や『悪の華』が惹起した、文学と道徳をめぐるかまびすしい論争に油を注ぐことになった。サント＝ブーヴはこの問題に深入りしなかったが、小説のテーマがテーマであるだけに、こうした論議は避けられないところであった。1858年8月5日付の「デバ」紙に掲載されたイポリット・リゴアの『『ファニー』論』は、さしずめ攻撃の急先鋒と言えよう。コレージュ・ドゥ・フランスの教授で、王党派系の新聞「デバ」の論客であったリゴアは、道徳問題には殊の外厳しかった。彼は先ず、『ファニー』は「真実の物語」と「内面の秘密」の「告白」という「二重の性格」を持つとした上で、この小説は明らかに『ボヴァリー夫人』の悪しき模倣であり、「フローベール氏と同様、フェドー氏も真実の探究を過度に押し進めるあまり、虚偽と紙一重に至っている」と主張する。さらに、三児の母である人妻が、毎週若い情人の家で逢瀬を重ね、また、いかに嫉妬に駆られたとはいえ、情人がこともあろうに夫婦の寝室を覗くなど外であるのに、これを刺激的な筆致で微細に描写し、バルコニーの場面などは延々9ページも続く、まったく言語道断であると糾弾している。

『両世界評論』の批評家モンテギュは、同誌1858年11月1日号に『ファニー』評「リアリズム文学の内面の小説」を発表している。いわゆる道徳問題に関しては、『ボヴァリー夫人』が仮に不道徳でないとしても、『ファニー』はまったく淫らなだけだとしながらも、その所説には小説論としてなかなか正鵠を射た部分が多い。即ち、彼は言う。

「初めて読むと、この本は幻覚をもたらす。ある種の浮き彫りによって、ある種の色彩によって、ある種のリズムによって感銘を与えるのだ。そして、さほどの抵抗もなく、終わりまで読み進んでしまう。著者は巧みに読者に鞭を入れ、拍車を入れて、考える時間を奪い取るのである。しかし再読すると、すべては一変する。幻覚は霧消し、浮き彫りは消え去り、色彩は色あせて、リズムは不協和に満ちているのだ。著者は、読者が既に一緒に辿った道を駆け巡らせるべく拍車を入れる力を失っていて、初めての時は速く読んだので消え失せてしまっていたショッキングな無数の細目、これらを読者は見分けるようになる。この本の真価は、こんな表現が可能とすれば、魔術幻灯めいた価値である。つまり、著者がある何人かの文学の魔法使いの家にしげく通り、彼等の降霊術の魔術書を解説しようとした、そんな感じがするのだ。不幸にして、術が生半可で、文学の代数のもっとも複雑な公式の幾つかは知っているが、算数の初歩に無知なのである。再読して目につくもう一つの欠点は、耐え難い単調さである。本の最初から終わりまで、状況が変化せず、青年の嫉妬の情念は不動で、うんざりするほど繰り返される。それは情念というより固定観念であり、幻覚だ。以上が、本全体が残す印象である。」

好奇をくすぐる新奇な趣向は、社会の病弊の的確な診断と精妙な心理分析と相まって、一時は読者を幻惑するが、意匠の鍍金が剥げてしまえば、腕の未熟さとリアリズム派に通弊の単調さのみが目につくという指摘は、人を首肯させるに足るものだろう。いずれにしても、批評の動向は毀誉褒貶相半ばするものであったが、『ファニー』は着々と版を重ねていく。既述のように上梓された1858年に11版、翌59年にも6版という具合である。時の人フェドー

は少々自信過剰の天狗となり、次第に友人達に敬遠されるようになる。ルイ・ドゥ・コルムナンしかり、ボードレール、マクシム・デュ・カンもまたしかりである。と同時に、一躍人気流行作家となった彼は、才能を浪費して次々に似たような趣向の作品を書きまくる。リアリズムを敵視する孤高の奇人バルベール・ドールヴィイは、「作家の才はある」としながらも、「その作は話にもならない」と一言のもとに切り捨てているし、あれほど賞揚したサント＝ブーヴさえ『我が毒』（1862）の中で、「フェドーの事件で、新たなもう一人の才能ある人間の登場を望んだのには、私にとりわけ罪がある。〔……〕フェドーは、あれ以来、己を放棄し、月並みになってしまった。今やどうでもよい存在だ」と言わざるを得なくなるのである。こうした発言と呼応するかのように、一時のブームが潮が引くように去ると、『ファニー』の売れ行きも一挙に下降線を辿る。1860年には早くも3版のみ、61—62年で2版という落ち込みようである。その後、手直しや新版で挽回を図るものの、68年には遂に1版を数えるだけで、宿痾のリュウマチで半身不随の身を忘却の闇に沈めながら、彼は73年52歳の生涯を閉じる。そして死後の74—77年の2版を最後に、さしもの超ベストセラーもその命運がほぼ尽きたかに見えるのだ。

世紀末のおよそ20年間、自然主義の崩壊そしてイデアリズムと象徴主義の時代に、フェドーあるいは『ファニー』について語られることはなかった。しかし、確かに昔日の輝きを取り戻すことは二度となかったが、世紀の変わり目あたりから、時に口の端に上るようになる。これには、ポール・ブルジェ（1852—1935）に代表される、心理小説の伝統の復活が底流にあるのだろう。事実、『ファニー』はリアリズム小説としてよりも、心理分析小説として見直されていくのだ。例えば、レミ・ドゥ・グールモン（1858—1915）は1909年、「50年後の今日、この作品は〔……〕いささかも時代遅れを感じさせない心理学の作」であり、「『ボヴァリー夫人』とは比較し得べくもないとしても、〈心理小説〉の源泉を恐らく発見するであろう」と述べている。ロマン主義とリアリズムの混合を見てとったモーリス・ルヴァイヤンの見解（1924）は、やや異なるものの、「恐らく『アドルフ』とは言わなくとも、少なくとも『ドミニック』には値する」とするポール・スーデーの見方（1928）も、フランス心理小説の傑作の中で『クレヴの奥方』や『アドルフ』と肩を並べ、『ドミニック』より上位を占めると、きわめて高く評価したフェルナン・ヴァンデランの所説（1937）も、この系譜に属するものである。こうした機運を反映して、1930年にはブロン書店が叢書の一冊として『ファニー』を刊行、ストック社もこれに続き、1948年にはジャック・クレベの簡にして要を得た解題「『ファニー』の歴史と運命」を序とした、リトグラフ挿絵入り大型豪華限定本が印刷連合より出版されている。

今日、『ファニー』はごく少数の愛好家、そして文学史家の内に密やかに生き続けているにすぎない。これは不当な忘却と言うべきであろうか。テーマの新奇性が失せた現在、作品全体の単調さと文体の凡庸さが、こうした判決を必然的に導き出させてしまう以上、審判自体は不当なものではない。それにしても、リアリズム派の心理小説の一典型として、歴史的には無論、また今日的な視点からもいささか見直しの余地があるのではあるまいか。

## おわりに

多くの同種の現象と同じく、『ファニー』と『ボヴァリー夫人』の逆転現象の秘密を十全に説き明かすことは、現代の文学研究のあらゆる手法を駆使しても不可能であろう。しかも、こうした分析は、所詮決まっている結論へと帰着させていく結果論、あるいは具体性を欠いた抽象論に陥ってしまい勝ちである。本小論も、結局作品批評史の手法に基づいて、『ファニー』の浮沈を辿り、あわせて1850年代リアリズムの一面と大衆を視野に入れた文学受容の変遷の一端をなぞったものにすぎない。しかしながら、そこには直接間接に、自ずと文学全般そして個別作品双方に関わる問題性が浮かび上がって来るはずである。

同時に、特に我が国のフランス文学研究の現状は、様々な制約によっていわゆる大作家、大批評家そして名作と言われるものに偏る傾向がある。勿論、これは研究の正道であろうが、文学の底辺を支えた幾多の無名の作家達とその作品、さらに一般の読者達に目を向けることなしには、上記の研究も真に実り豊かな達成を得まい。

確かに、一世を風靡した『ファニー』も、今日では『ボヴァリー夫人』の偉大さを逆照射する標識灯の一つになってしまっている。しかしたとえ一時にもせよ、読者大衆の熱狂的支持を得たという事実が意味するところは、決して小さくはない。のみならず、『ファニー』は愛、不倫、嫉妬という永遠のテーマに新趣向を加えて、フランス小説の流れに一石を投じ、またアンリー・ベック（1837—99）、ポール・ブールジェ、オクターヴ・ミルボー（1850—1917）といった作家達にも影響を与えたのである。

こうした歴史的評価は別にして作品自体を虚心に読む時、メロドラマ的な安易さを始め様々な欠陥は目につくとしても、愛すべき小品だという印象は、今日の多くの読者も抱くのではあるまいか。『ファニー』は今、ささやかな関心を我々に求めている。

## Sommaire

Essai sur *Fanny* d'Ernest Feydeau

— Un best-seller oublié —

Hisashi TAKIZAWA

En 1858, Ernest Feydeau sortit son roman *Fanny*, qui devint un best-seller sous le Second Empire, à peine un an après la publication par son ami Gustave Flaubert du très controversé *Madame Bovary*. En s'aventurant à son tour dans le thème de l'adultère, Feydeau lui fit tout de suite de l'ombre et atteignit des sommets de popularité. Rares sont ceux, cependant, qui, aujourd'hui, se souviennent encore de *Fanny* et de son auteur. *Madame Bovary* règne en reine dans tous les palmarès, tandis que *Fanny* a sombré dans la nuit des temps. Victime d'un injuste oubli de la part du lecteur moderne ou sanctionné par l'impitoyable loi du temps ? Oui et non ! Certes, l'ouvrage dissèque avec une précision chirurgicale le thème de la jalousie, et l'analyse psychologique de l'amour y est conduite avec une subtilité étonnante ; mais il n'en est pas moins fort ennuyeux et guère plus qu'une charmante production caractéristique de l'école réaliste.

Dans notre étude nous nous concentrons sur le phénomène — universellement observé — du renversement des valeurs et nous tenterons d'apporter des réponses dans le présent essai qui est structuré comme suit :

- I . Ernest Feydeau et *Fanny*
- II . Situation littéraire dans les années 1850  
— Formation du réalisme —
- III . Esquisse historique des critiques sur *Fanny*